

がん検診

■ 胃がん検診（職域・地域）

職域検診では、X線撮影と内視鏡(施設検診のみ)による胃がん検診を行っている。X線による検診は、令和2(2020)年度は新型コロナウイルス感染の影響により41,586名と減少したが、令和3(2021)年度は47,729名まで回復してきている。当施設で二次検診として内視鏡検査を行った93名から1例の胃がんが発見された。内視鏡による検診は、令和2(2020)年度2,431名であったが、令和3(2021)年度は大幅に増加し4,031名であった。胃がんの発見は3例であった。

地域検診では、神奈川県下14市町村より委託を受けたが、新型コロナウイルス感染の影響により2市町村が中止となったため、12市町村で検診車による検診を実施した。8,408名が受診し、15例(男性12例、女性3例)の胃がんを発見した。また、2例の食道がんの発見もあった。

■ 大腸がん検診（職域・地域）

大腸がん検診は免疫学的便潜血反応を用いて行っている。

職域検診では、令和2(2020)年度を受診者数は81,438名であったが、令和3(2021)年度はやや増加し、82,188名(男性57,185名、女性25,003名)が受診し、要精検率は4.6%であった。

地域検診では、令和3(2021)年度に検診を受託した団体は15市町村であったが、新型コロナウイルス感染の影響により1市町村が中止となり、14市町村で検診を実施した。10,094名(男性3,836名、女性6,258名)が受診し、要精検者数は594名で、その中から17例(男性4例、女性13例)の大腸がんが発見された。

■ 超音波検診

超音波を対象物に当ててその反響を画像化する検査方法であり、何回行っても人体にまったく害のない検査である。腹部の実質臓器(肝臓、膵臓、胆のうを含む胆道、脾臓、腎臓、および腹部大動脈など)を対象とした検査で、令和3(2021)年度は22,095名が受診した。各臓器の悪性腫瘍を疑う所見については精密検査が必要な「要精密検査」(全体の2.4%)として、専門医療機関へ紹介している。そのほか肝血管腫、脂肪肝、無症候性胆石、胆のうポリープ、大動脈の石灰化などが診断される。これらの有所見者については近医に紹介するほか、当協会では超音波外来においてフォローアップを行っている。

■ 肺がん検診（職域・地域）

胸部X線と喀痰細胞診(ハイリスク者のみ)による肺がんのスクリーニング。当協会専門医による二重読影を行い、過去画像があればそれを参照し比較読影を行っている。

職域検診では、結果を依頼企業に返しているが、コロナ禍にも関わらず、検診開始時期こそ遅れはあるが、実施団体(企業等)数も受診者数も増加しており、発見肺がんは3例あった。

住民検診は、県下の11自治体(横浜市を除く)から検診(二次読影)を受託していたが、コロナ渦のため1自治体で中止となり、受診者数ではコロナ渦前に比して59.0%にとどまっている。この中で8例の肺がんを発見した。今年度は市町村別の集計は行っていない。

住民検診の流れは、読影結果を医療機関へフィードバックし、要精検とされた例については各医療機関で最終判定をして、受診者に結果が伝達される。関係医療機関だけでなく関係自治体・医師会の担当部署を含めて、精度管理の向上に努めている。横浜市の肺がん検診では、平成20(2008)年度の開始時か

ら当協会が中区での二次読影にかかわっている。

また、人間ドックや肺検診でCT検診受診希望者を対象に、MD-CTによる低線量撮影(1 mSv程度の低線量、通常施行されるCT検査の1/10程度の被ばく線量)での肺がんCT検診を行っている。CT検診認定技師が一次チェックを行い、疑わしい例では薄切り撮影を追加し、その後医師2名(1名は呼吸器専門医または放射線診断専門医)が別個に二重読影を行っている。コロナ渦中でもCT検診受診者数は973名(男性660名、女性313名)で、今年度は2例の肺がん発見があった。

■ 子宮がん検診（施設、地域・車検診）

施設での検診は、診察(内診を含む)・細胞診による子宮頸部および体部のスクリーニングを実施している。希望によりHPV検査を行っている。問診と内診により発見される子宮筋腫や頸管ポリープなど、一般婦人科疾患の早期発見にも努め、適切に指示している。

車検診は、問診・細胞診による子宮頸部のスクリーニングを行っている。県内の5大学病院と県立がんセンターの婦人科腫瘍専門医からなる「子宮がん車検診実施検討会」を組織し、精度管理・向上に努めている。診察・細胞採取・診断は、同検討会の各大学病院婦人科医師が担当している。

令和3(2021)年度、検診を受託した自治体は18市町村(内1市町村が中止)で12,261名が受診。今年度は2例の子宮頸がんの発見があった。いずれにせよ、施設、地域、車検診ともに、コロナ禍のために受診者が大幅に減少した。

■ 乳がん検診（施設・地域）

施設での検診は年齢に応じてマンモグラフィ・乳腺超音波検査のいずれかあるいは両方を実施。また希望者には、視触診を行っている。当協会では、精密検査まで総合的に検診を行っている。令和3(2021)年度は18,648名が受診し、53例のがんを発見している。例年の受診者は20,000人前後で発見がんは50例前後なので、令和3(2021)年度はコロナ禍の影響から徐々に回復してきた。

検診車による地域での検診は、国の指針に準拠しマンモグラフィ検診を実施。読影は「神奈川県乳がん集団検診協力医療機関連絡会」の指導にもとづき、検診マンモグラフィ読影認定医師が実施している。今年度、検診を受託した自治体は18市町村で、11,124名が受診し45例のがんを発見した。地域検診受診者もほぼ例年に近づいており、コロナ禍の影響が少なくなってきている。

また平成18(2006)年度より、“ピンクリボンかながわ”事務局としてNPO法人乳房健康研究会と共に、乳がんの早期発見・早期治療を目指し、乳がん検診受診率向上に努めている。

■ 神奈川からがんをなくす会・ACクラブ

会員制のがん検診組織。ACとはAnti Cancerの略。「神奈川から肺と胃のがんをなくす会」を前身として昭和51(1976)年に発足した。消化器(胃・大腸)がん・肺がん・乳がん・子宮がんの早期発見・治療を目指し、経年変化を追ったきめ細かい対応を行っている。

令和2年(2020)年度はコロナ感染症の蔓延により全国でがん検診受診者数は大幅に減少し、検診で見つかるがんの手術症例の減少も明らかになっている。ACクラブの実績も全国と同様に、前年度よりもすべてのがん検診において受診者数は減少している。

当協会は受診者が安心して検診を受けられるよう、感染防止対策を徹底している。また、令和3(2021)年度からは大腸内視鏡検査を再開し、症例数が増加している大腸がん検診の充実を図っている。